

## 小児の溶連菌感染症

小児で発疹がみられる病気は多くあります。例えば麻疹、風疹、突発性発疹症、伝染性紅斑（りんご病）、手足口病などはよく知られていますが、原因のよくわからない発疹もしばしばみられます。これらのウイルスによる発病は合併症のない限り自然に治癒します。

細菌感染に伴って、もっとも発疹のよく見られるのは溶連菌感染症です。これはA群B溶血性連鎖球菌（以下溶連菌と略）により咽頭炎や扁桃炎が起こり、溶連菌の毒素によって発疹が出現します。症状は発熱、咽頭痛、莓舌などの他、全身に小さな赤い発疹が散在し典型的なものでは後に手のひらや足の裏の皮が大きくむけます。

この病原菌はペニシリン系、セファロスポリン系の抗生物質によく反応し、喉頭炎や扁桃炎は数日の内に自覚症状はなくなります。簡単に発熱もとれ治ってしまったと考え、治療の途中で薬を止めてしまうと、発病後1～2週間たって胃炎を起こします。最近はかなり少なくなりましたが、リュウマチ熱の原因となることもよく知られています。

従って溶連菌による喉頭炎、扁桃炎の場合には自覚症状がまったくなくなっても10日間薬を内服し続け、続発する合併症を予防することが必要です。

最近咽頭ぬぐい液を調べることによって、数分間で、かなり正確に溶連菌による咽頭炎や扁桃炎を診断できます。疑わしい場合は検査をうける確かな治療を受けましょう。

平成8年3月  
日下 高志